

# Unplugged

～ 冬眠蛙 詰将棋短編集 ～

まえがき

詰将棋創作を始めてもう15年が経過しましたが、正直なところ、自分の詰将棋作家としての評価がどのようなものであるか、よくわかっていません。ただし、私の、私自身に対する作風評価は、「比較的あちらこちらと飾りつけしたくなるタイプ」というもの。1個の素材があったとして、別の素材を加えたり、逆算して伏線を入れたり、素材を引き立てる序奏をつけたり、そういう作業が一番作図上楽しい時間。必然的に仕上がる作品は、素材と比べて形が重くなったりすることが多いわけで、ちょっとした悪い病気だよなあ、なんて感じることもあります。

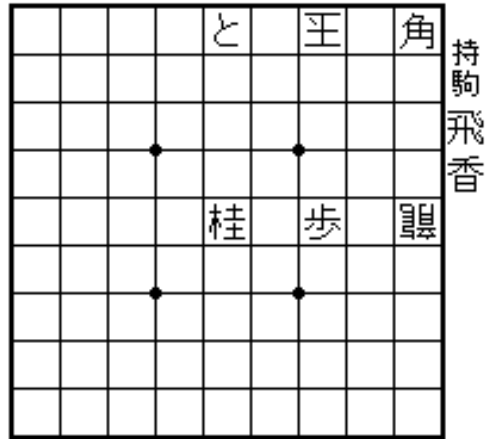
今回のこの作品集に納めた作品は、どちらかという自分にしてはあっさりとして軽く表現したものです。毒されてません（笑）。

収録した作品は5手～15手までですが、今回は解かれることを重視して5～9手24題と11手～15手12題の二部構成。後は配置駒数順の並びとしました。

タイトルの「Unplugged」は音楽界において、「電気楽器を使用していない」という意味で使われています。修飾がほとんどない作品群からアコースティックな味わいを作品から感じ取ってもらえれば、作者にとって幸いです。

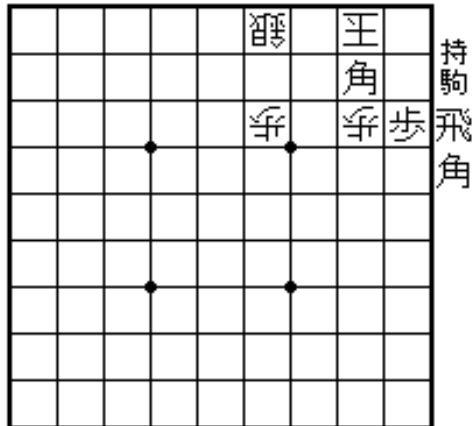
**5手～9手の部**

第1番



(発表先-詰将棋パラダイス)

第2番



(発表先-読売新聞)

第1番 解答

▲33香 △21玉 ▲32香成△同玉 ▲22飛 △33玉  
▲43桂成△同玉 ▲52飛成 迄9手。

最初は初形左右対称形。他の作家はどのように初形象形の世界を創るのかは知らないが、自分の場合は言うまでもなくただの偶然である。

初手は34でも良い。これが気になるのであれば35歩を玉方34歩にすればいいのだが、あまり気にならなかったので形が整う方を優先した。22飛に31玉なら43桂生までで、作意の成と対比させているのが一応の狙い。

よく考えると詰将棋パラダイスの幼稚園に発表したのは今のところ本作のみ。保育園は1作もない。別に敬遠しているわけではなく、単に「向いている」と感じる作品がなかなか創れないだけ…と思う。

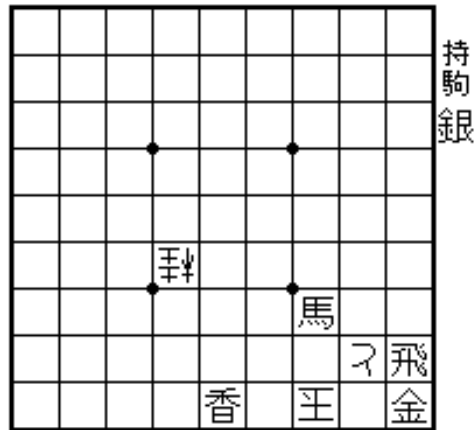
第2番 解答

▲11角成△同玉 ▲33角 △21玉 ▲12歩成△32玉  
▲31飛 △同玉 ▲22と 迄9手。

打ち換えは好んで作るテーマのひとつ。「〇〇だと詰まないが、□□だと詰む」という詰将棋ならではの論理性が最も表現しやすい手段だと思う。本作の場合、初手他に手が無いのはまあ置いておきますか。(笑)

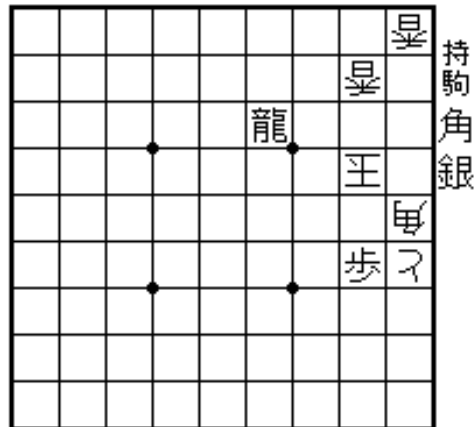
読売新聞西日本版は詰将棋パラダイスが作品を斡旋してアマチュア作家の作品を隔週で掲載していた。私も作品提供を何度か頼まれたが、作図条件がとんでもなくキツくて、ネタ切れを起こして以降は断り続けている。最近は依頼がこないが、まだ続いているのだろうか？

第3番



(発表先-詰将棋パラダイス)

第4番



(発表先-詰将棋パラダイス)

第3番 解答

▲29金 △49玉 ▲38銀 △同と ▲39金 △同と  
▲48馬 迄7手。

ヤング・デ・詰将棋の課題「七色図式の7手詰」に詰とうほく名義で発表したもの。『こんな作り難い課題なら詰とうほくジャックできるのでは』と西君と何作か拵えたが結局2作応募してこれだけ採用となった。編集部の須藤さんによると10作以上の応募があったとのことではいかにも無謀なハナシだったかがよくわかる。(笑)

本作、よくある筋ではあるが金寄り捨てを2回繰返して趣向の香りを出してみたつもり。一応首位となって会合名義で出した面目?を保った。

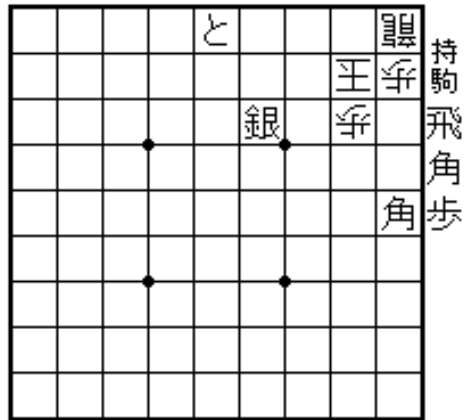
第4番 解答

▲46角 △14玉 ▲13角成△同香 ▲34龍 △24角  
▲23銀 △同香 ▲25龍 迄9手。

初手25銀だと35玉、53角に44歩で逃れ。46角として13角成とすぐ成捨てる。あとは龍を活用するだけ。

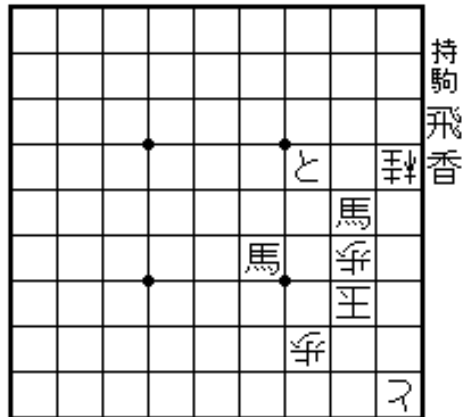
デビューしたての頃の作品で、捨て合や移動合に魅せられてこの世界に入りこんだ私には、どんなに当たり前でも限定合が入るだけで嬉しかった。この傾向は今でも大して変わりはない。

第5番



(発表先-読売新聞)

第6番



(発表先-将棋マガジン)

第5番 解答

▲33角成△同玉 ▲34飛 △22玉 ▲13角 △同玉  
▲14歩 △22玉 ▲32銀成 迄9手。

一応新聞向けに出したのだが、将棋のルールとして打歩詰は最も認知されていないモノのひとつと思う。そういった意味において、新聞向けの打歩モノというのは大駒の生が出てくるような「あ、こういうルールだということの手が成立するのか！」といった作品の方が良さそうな気がする。

本作は32銀成だと打歩詰の禁なので22の逃げ道を残すために13角と捨てなくてはならない、という仕掛けがメイン。少しでも面白さがわかってもらえれば…という気持ちである。

第6番 解答

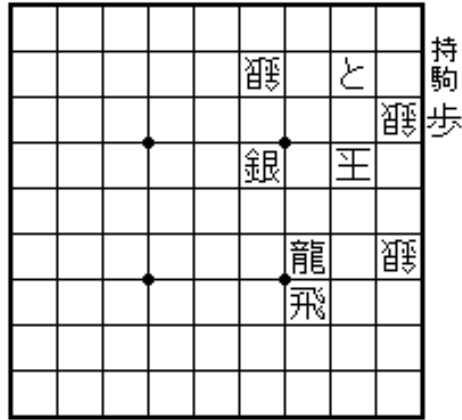
▲16馬 △同玉 ▲15飛 △同玉 ▲17香 △16合  
▲24馬 迄7手。

大学の後輩が持っていた詰パラの文章（確か中学校の結果稿だったと思う。山下雅博氏だったかな？）で「引っ張り出してフタをするような手順はあまり見ていない」というものを見て、「では作ってみようか」と拵えた作品。7手詰で3手収束というのもどうかと思うが、一応想定どおりの手順で、36馬引とか28飛とかちょっとでも読んでもらえればまあヨシとしたところ。



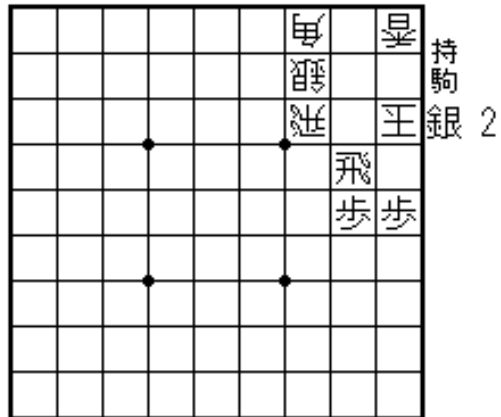


第11番



(発表先-詰将棋パラダイス)

第12番



(発表先-読売新聞)

第11番 解答

- ▲26龍 △25金 ▲33飛成△同銀 ▲35銀 △14玉  
▲15歩 △同金 ▲23龍迄9手。

初手35龍は14玉で打歩詰なので論外だが33銀生とか23ととか目に付く手はそれなりに多いはず。で、その裏をかいてポンヤリ26龍と寄る手が狙い。他合は34飛、同玉、35龍で詰む。33飛成と捨てれば後は易しい。厳密には違うのだけれど、少し森田手筋的な味はあるか?と当時は思っていた。今見ると全然関係ない。

毎日コミュニケーションズから最初に5・7・9手詰パラダイスが出版された頃に柳田明氏から「9手詰だと君のところでいつも躓く」と言われた記憶がある。多分本作のことを指していたのではと予想している。

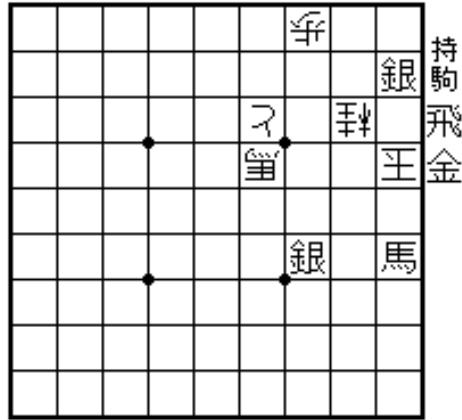
第12番 解答

- ▲22銀 △同角 ▲14飛 △23玉 ▲12銀 △同香  
▲24飛 △13玉 ▲14歩迄9手。

銀捨て～飛寄りを繰返す超ミニ趣向作。作品の出来は別にして(いや、ほんとは結構気に入っているんだけど)、こういったタイプの作品にはそれなりの価値があると思う。最近パラでもヤン詰等でしばしば同じようなミニ手順趣向作が見られるのは、あまり解図力がない私にとって、ちょっと嬉しい傾向である。

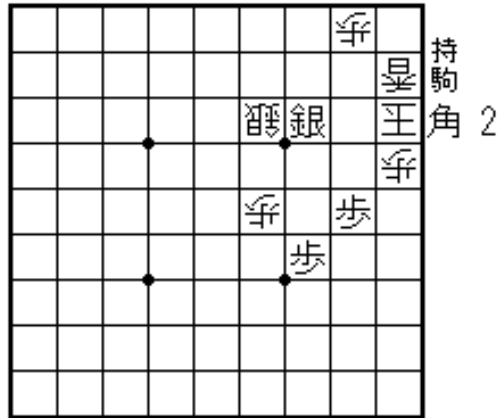
24飛→14、詰方13桂追加でもう2手追加する案もあり迷うところ。あなたならどうする?

第13番



(発表先-詰将棋パラダイス)

第14番



(発表先-将棋マガジン)

第13番 解答

- ▲15飛 △24玉 ▲25飛 △33玉 ▲15馬 △同桂
- ▲22飛成△同玉 ▲23金 迄9手。

初手25銀とか25馬に誘われると苦しむのではないかと思う。15飛～25飛は筋が悪くて指し難い。が、15馬、22飛成の連続捨駒でぴったりつかまっている。

この手の不利感狙いの作品につきものなのが深い紛れ。ご多聞にもれず本作も作図時に紛れに手を焼き、泣く泣く当初金の予定だった43金をと金に変えている。自陣と金にこだわるガウかよ、と言われそうであるが、一応私には私なりのスタイルがある。とか言いつつも、どちらかという、割り切れてはいるけど有効合に見えなくもない6手目24合の変化が不満なわけだが。

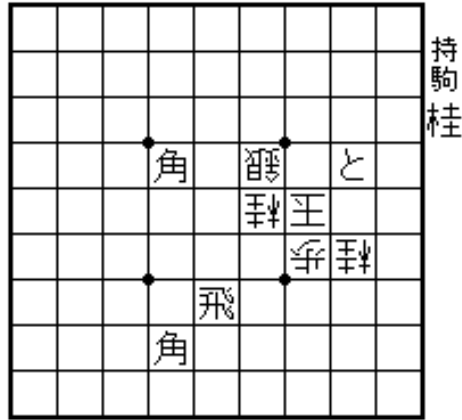
第14番 解答

- ▲22角 △23玉 ▲34角 △同玉 ▲24銀成 迄5手。

実戦形と紛れをなるべく多くすることを意識した図。36歩とかはちょっと気負いすぎているような気もする。まだ学生だった頃の作品で後輩が苦しんでいるのを見て楽しむ悪い先輩だった。

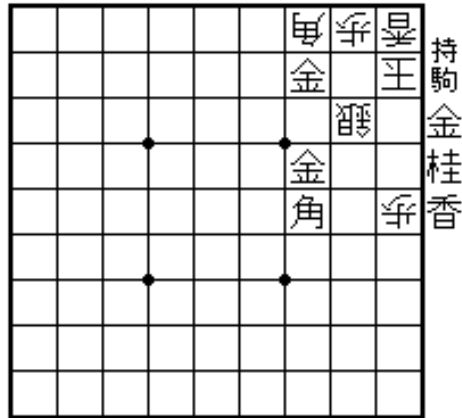
パラで発表したときに穂上武史氏から「これをセンスに富んでいると言わずして」という短評をいただいた。デビューしたての自分に大きな力を与えてくれた一言として、今でも鮮明に記憶している。

第15番



(発表先-将棋マガジン)

第16番



(発表先-読売新聞)

第15番 解答

▲46角 △同玉 ▲58桂 △35玉 ▲55飛 迄5手。

デビューした年の作品。まさしく純粋な一発芸。しかし5手でも打ち換えて、余程このテーマが好きだったんだらうなあ。この頃は。

初手47飛は57桂成、同角、46歩で逃れ。いわゆる一般的な大道棋とはかなり構図が異なるが、ちょっとした客寄せに使えるかな？

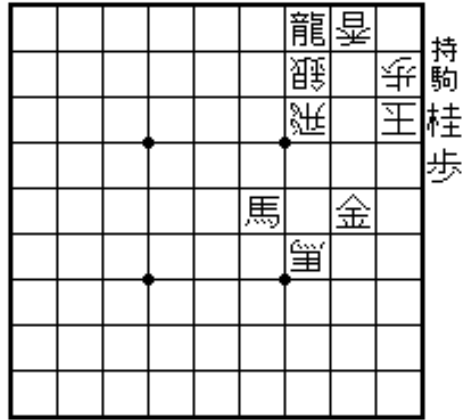
5手詰は第14・15番のみ。超短編は詰将棋にはまりだした頃に塩見一族の傑作群に苦しんだせいか、自分で作ってもどうしても物足りなく感じるようだ。

第16番 解答

▲22金 △同角 ▲14香 △同銀 ▲24桂 △13玉  
▲12金 △同香 ▲32桂成 迄9手。

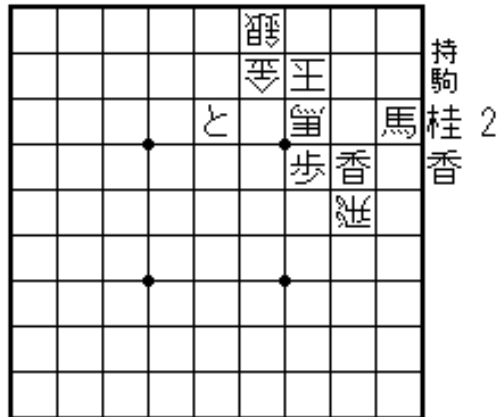
桂のソッポ成による詰上りが一度やってみたかった、というだけの作品。22金が入らなかったらとても作品と呼べない内容だと思う。その22金が初手、という構成は本当はあまり気に入らないのだが、気の利いた逆算ができそうでなかなかできない。たとえば詰方12銀・24桂を配置し、玉方23銀を14にすると13手詰で一度捨てた24桂が再度出現…という内容になるが、紛れが皆無なので単なる冗長な序とも取れて微妙なところ。新聞向けの作品なら…ということで割り切ったが、なんとなくもったいないような気もしている。

第17番



(発表先-冬眠日記)

第18番



(発表先-読売新聞)

第17番 解答

- ▲46馬 △35飛 ▲同馬 △同馬 ▲14歩 △23玉
- ▲43飛 △同銀 ▲15桂迄9手。

初形から打歩詰であり、46馬は詰方の勢力を弱める手段。なので取られようが何されようが構わない、というわけ。取らずに35飛と移動合で延命を図るが、43飛がぴったりで詰む。

36馬は57馬でも良いし、その方が移動合のインパクトが強くなるのだが、軽い手順に比してあまりに形が広がりすぎるような気がしたので、ブログに載せたときの形を修正している。ついでに逆算してみようか、とも思ったがどうも駒数が増えるばかりなのでやめた。ブログでも書いたが、一般将棋ファン向けの作品としてはちょうど良いレベルだと思っている。

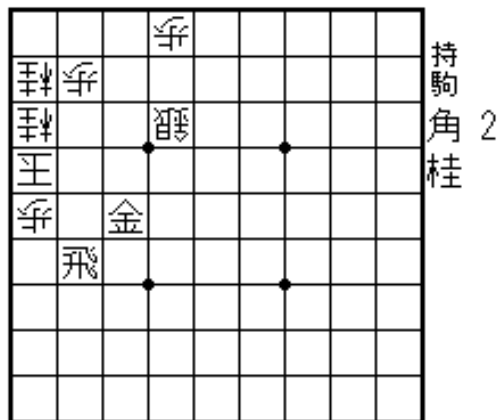
第18番 解答

- ▲44桂 △同馬 ▲33歩成△同馬 ▲44桂 △同馬
- ▲34香 △同馬 ▲22馬 迄9手。

先に手順を想定してそれが成立する舞台を探るやり方の作品。新聞向けとして作るものなので、最低でも盤面一桁で、という条件付であったが、苦心惨憺の末になんとか9枚におさまった。3手目23馬の紛れや馬を取る手、香が成る手などなど、紛れはそこそこ多いと思う。こういったものを作るたび、中段玉の自由度を感じる。

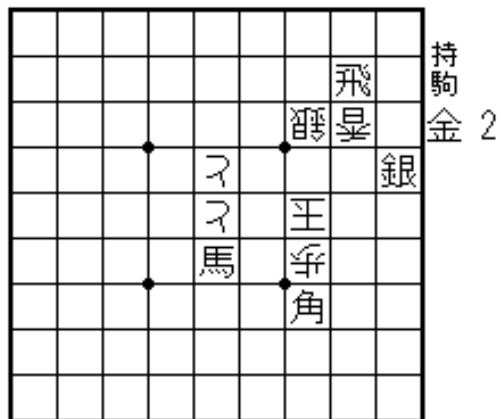
もちろん解く人にそういった苦勞をわかってほしいとは思わない。馬の翻弄を楽しんでくれれば作者としてこの上ない幸いである。

第19番



(発表先-将棋マガジン)

第20番



(発表先-冬眠日記)

第19番 解答

▲83飛成△同玉 ▲94角 △同玉 ▲72角 △同銀  
▲86桂 △83玉 ▲74金 迄9手。

典型的な邪魔駒消去モノであるが、なるべく不利感をもたせるように下部の配置には気を配ったつもり。ちなみに94角に73玉は51角~65桂迄。

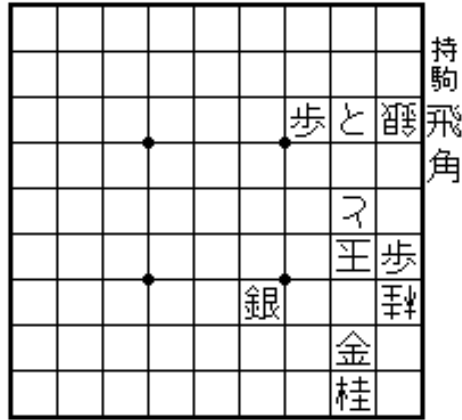
投稿時は上に一段ずれていて87飛が龍だったが余詰んでおり、97銀が追加されて掲載された。紛れのが大半が消えてしまう、ちょっと勘弁してよ、という配置だが、当然ながらそれは自分のせい。文句が言えるはずがない。締切ぎりぎりでも余詰が判明するとういうことが当時は稀にあった。詰棋検討ソフトが充実しているので最近は多分ほとんどないだろう。

第20番 解答

▲25金 △同香 ▲26角 △同香 ▲24飛成△同銀  
▲34金 迄7手。

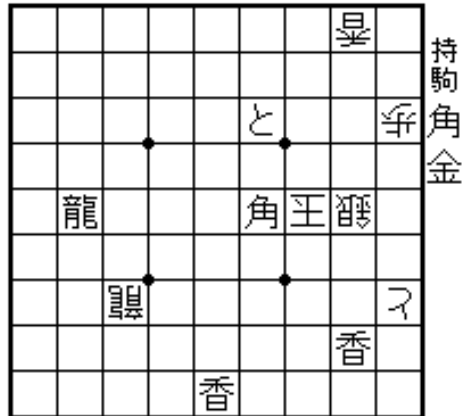
上に逃がしそうな26角を主題に一局、ということで拵えたものであるが、危ない筋がいかにも多く、残念ながらそれほどの不利感は演出できていない。駒数を増やしてももう少し劇的にしたのがブログ上で開催した第1回のプレ短コンに出したものであるが、あまり良い出来とは言いかねる内容なので、いかにも手筋モノ、という雰囲気の本作の方をここに収録することとした。

第21番



(発表先-将棋世界)

第22番



(発表先-冬眠日記)

第21番 解答

▲53角 △16玉 ▲14飛 △15と ▲27金 △25玉  
▲35角成△同玉 ▲36金 迄9手。

14飛の退路封鎖に対して15との移動合で応じるあたりが主題であるが、17桂の不自然さはぬぐいようがない。角打から入って角成捨てで終る手順構成はいかにも自分好みではある。

よく見てみると私の作品の中で初形に大駒が配置されていないのはほとんどない。そういった部分も含めて、自作ながら違和感が残っている作品。

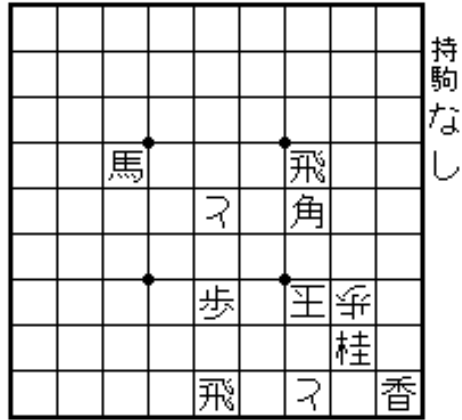
第22番 解答

▲24角 △同香 ▲18角 △46玉 ▲35龍 △同玉  
▲45金迄7手。

初手、というより初手の変化の同玉、23角成、という手順がやってみたかった。できれば24の捨駒は置き駒捨てにしたかったがうまい理屈が見付からなかった。

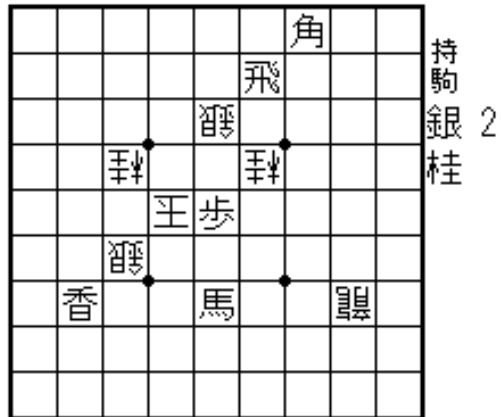
収束も後付けであり、苦心の色がありありと浮かぶ。昨今の超短編は紛れ・変化を含めた総合力で魅せるのがトレンドとなっていており、そういった意味では見た目だけ派手な本作などは既に古典的なものなのかもしれない。

第23番



(発表先-冬眠日記)

第24番



(発表先-詰将棋パラダイス)

第23番 解答

▲24角 △28玉 ▲46角 △同と ▲29馬 △同と  
▲58飛 △19玉 ▲14飛 迄9手。

初手24角は48玉と逃げられたときに15角を用意したもの。44角では35歩合とされてオワとなる。が、28玉とされると限定移動の24角が既に邪魔になっている、というストーリー。先に29馬では46角に37歩とされてこれも逃れる。

構成としてはまずまずだが、配置駒数が難易度に比して多すぎるように思う。色々やってはみたが大駒4枚はあまりに強く、どうしようもなかった。若島正氏作(盤上のファンタジア18番)の収束を置き駒に変えられないかと手がけたものであるが、軽妙洒脱な氏の作品には及びもつかない。まあ爽やかなものばかりでも飽きるからたまにはこういうのもいいのでは、と言い訳しておこう。

第24番 解答

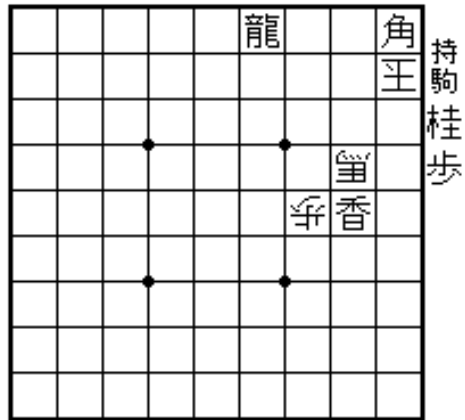
▲56銀 △同桂 ▲54銀 △同銀 ▲75馬 △55玉  
▲22角成△同龍 ▲47桂迄9手。

超短編の最後は大学卒業記念に創った連作あぶり出しの中の1作。ちなみに他の字がどんな作品だったかは全く覚えていない。当初は87香が桂だったし、持駒のうち銀1枚と桂は各々43銀・39桂配置だった。これだといかにも『ただのあぶり出し』である。そこをいじって『作品』に昇華させたわけだが、「もしかして…」と試して検討し、実現したときの喜びは詰将棋作家にしかわかるまい。ということで当時の作品の中では非常に印象に残っているもののひとつ。

なお、発表時は全体が一路右にずれていたが今回収録では字形バランスを考えて変更している。

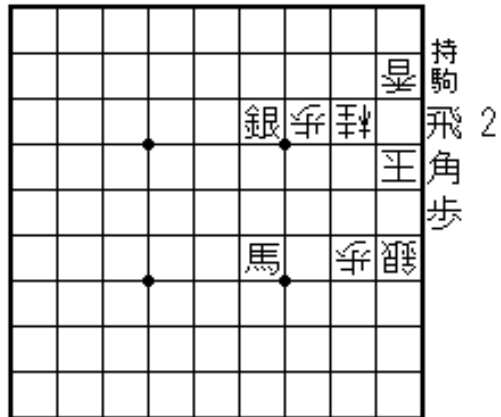
**11手~15手の部**

第1番



(発表先-読売新聞)

第2番



(発表先-冬眠日記)

第1番 解答

- ▲4 2龍 △3 2桂 ▲同龍 △1 1玉 ▲2 3桂 △同馬
- ▲1 2歩 △同馬 ▲2 1香成△同馬 ▲2 3桂 迄1 1手。

打歩詰においてはいくつかの「形」が存在しており、この3 2桂中合の形もそのひとつ。相馬慎一氏の看寿賞受賞作はこの仕組みを利用して天才的とも思える構想を実現しているが、本作はあっさり風味の仕上げ。2 4馬配置で初手に若干の味が加わっているところや、2 5香配置一枚で馬を吊り下げる順が実現できているところ等、纏まりとしてはますますかな、と思う。とは言いつつ、歩合回避のためだけの3 5歩は若干心残りではあるのだが…。

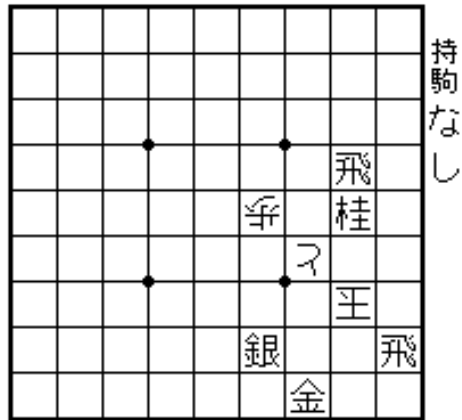
第2番 解答

- ▲1 5歩 △2 5玉 ▲3 4銀生△同歩 ▲2 4飛 △1 5玉
- ▲2 5飛 △同玉 ▲1 5飛 △同玉 ▲3 3角 △2 5玉
- ▲2 4角成 迄1 3手。

初手に打った歩が邪魔になり、2 4飛~2 5飛で消去するのだが、その前に3 4銀生を効かして3 3地点を開けておくのが伏線手。手順構成は(8手目同銀が変同になることを差し引いても)私好みである。

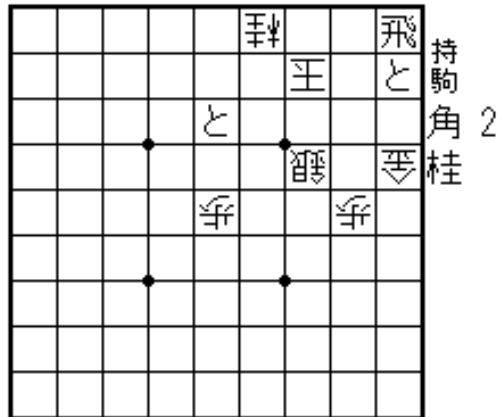
今見ると、持駒の歩は香でも良さそうだ。こういった場合、無条件で強い駒を選択するものだが、本作の場合、香にする利点(例えば効果的な紛れが増えるとか)も特に見当たらないので軽さを出す方を優先して歩のままとした。

第3番



(発表先-将棋世界)

第4番



(発表先-読売新聞)

第3番 解答

- ▲33桂成△25角 ▲同飛 △26と ▲28金 △36玉
- ▲37金 △同と ▲16飛 △25玉 ▲43角 △35玉
- ▲34角成 迄13手。

角中合～移動合という玉方連続合が主題。2手目26とは28金～37金～16飛～34成桂迄。また、25他合は同飛、26とのときに28飛で早い。

見た目派手な素材であるが、ちゃんと詰方の妙手が入る収束を散々探したものの、結局これ、というものは見付からなかった。いっそのこと…ということで収束を欲張らず、極力配置を削ったものがこれ。発表時はせめて…ということで角打角合により43の香を吊り上げる伏線を入れていたが、これだとしても63に駒を置かなくてはならず、手順に比してあまりに形が広がりすぎるので今回カットした。

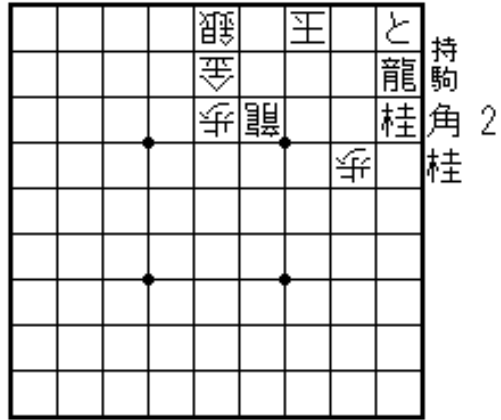
第4番 解答

- ▲31飛成△同玉 ▲42角 △32玉 ▲24桂 △同金
- ▲31角成△同玉 ▲13角 △32玉 ▲22角成 迄11手。

初手24桂では33玉で駄目なので31飛成～42角と打ち換え、24桂で金をずらしたところで再び31角成から13角と打ち換える。打ち換え好みの私らしさは出ていると思うが、紛れが薄いのであまり妙味が感じられないのが弱点。

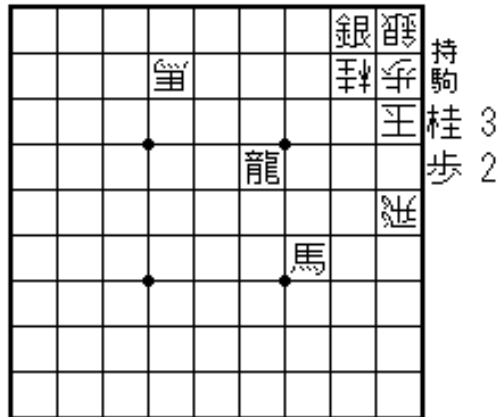
55の配置は最初はと金だったが、初手21飛成～55角に備えるだけなので、ブログで紹介したときの意見を取り入れて歩に変えた。若干でも紛れが出たでしょうか。

第5番



(発表先-読売新聞)

第6番



(発表先-冬眠日記)

第5番 解答

- ▲2 1 桂成△4 1 玉 ▲3 1 成桂△同玉 ▲1 3 角 △同龍
- ▲2 1 と △4 1 玉 ▲1 4 角 △同龍 ▲3 3 桂 迄1 1 手。

初手4 2角は4 1玉で逃れ。ここではまると1 3桂が邪魔駒であることにはなかなか気付かないのではないだろうか。…というよりも1 3角打の意味付け自体がわかりにくいので、結局のところ最後まで読みきることが必要となっている。こういった理屈の積み重ねによって一本化されたストーリー、というのは私の最も好みとするところである。

なお、本作は新聞向けに作ったことだけは記憶しているが、(掲載依頼が定期的に来ていたわけではないので) 実際に出したかどうかは覚えていない。以前他の素材を逆算して出した作品に「前に収束を新聞で見た」と言われて驚いたこともある。もしかしたら未発表だったかもしれないが、ご容赦願いたい。

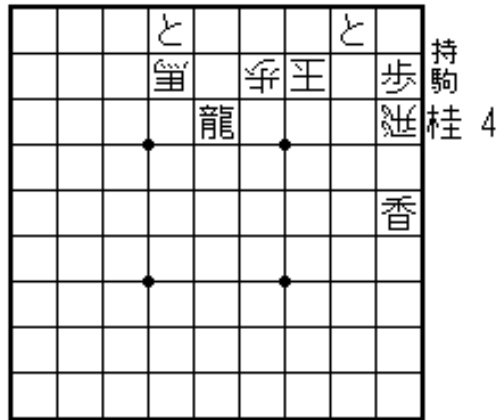
第6番 解答

- ▲1 4 歩 △2 3 玉 ▲3 5 桂 △同飛 ▲1 3 歩成△同歩
- ▲1 5 桂 △同飛 ▲1 4 馬 △同桂 ▲2 4 歩 △2 2 玉
- ▲4 2 龍 △2 1 玉 ▲3 3 桂 迄1 5 手。

桂と歩を使って局面をもみほぐし、1 4馬の一発で詰ます、という作品。収束ちょっと流れたが、手順の軽快さは作者好み。表紙に投稿したが難しいとかで没にされ、ヤン詰に転送されたがもったいないということで没にされた、という中途半端なはぐれモノ。

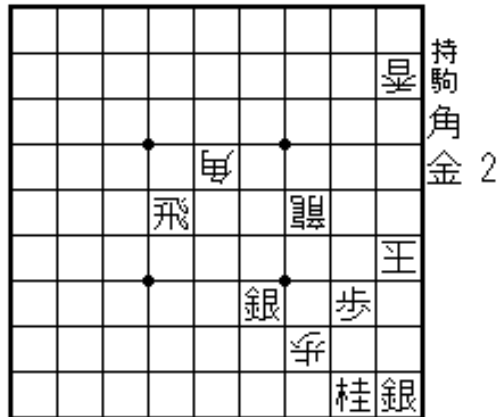
かつて大和敏雄氏が「受賞は運がよくないとできない」と書かれていたことがあったが、表紙の掲載も同じじゃないかな、と感じる今日このごろ。1 0年位冬眠した後で投稿すればお情けで載せてもらえるかしらん？

第7番



(発表先-冬眠日記)

第8番



(発表先-冬眠日記)

第7番 解答

- ▲44桂 △21玉 ▲11歩成△31玉 ▲23桂 △同飛
- ▲21と △41玉 ▲33桂 △同飛 ▲31と △同飛
- ▲51龍 △同馬 ▲53桂 迄15手。

読売新聞で発表した短編を持駒趣向に発展させたもの。ただし、正直なところ、持駒趣向というのはあまり興味がない。中村氏作の4銀連捨てとか、複合的な価値アップであればハナシは別だが。本作の場合、手順も桂打ってと金の擦り寄りの繰り返して若干趣向っぽさを出している。

当初は玉方51桂-25角配置で収束は52龍、同角、53桂迄だったが、持駒趣向の余波で変えざるを得なかった。変化を割り切るための15香配置を含め、物足りなさが残る作品。

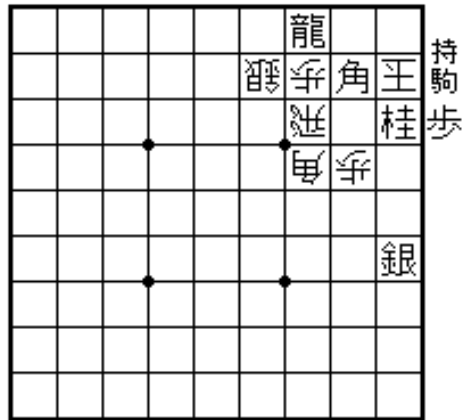
第8番 解答

- ▲15金 △同香 ▲34角 △27玉 ▲36銀 △同龍
- ▲16角 △同香 ▲25飛 △同龍 ▲37金 迄11手。

見た目よりも難しくなく、初手さえ決めてしまえば、後は手が伸びるままに駒を捨てていくと詰む。こういうのは点数こそ高くないが、解いていて気持ちよいのではないかなと思う。手筋物の人気が根強いのもなんとなくわかる。

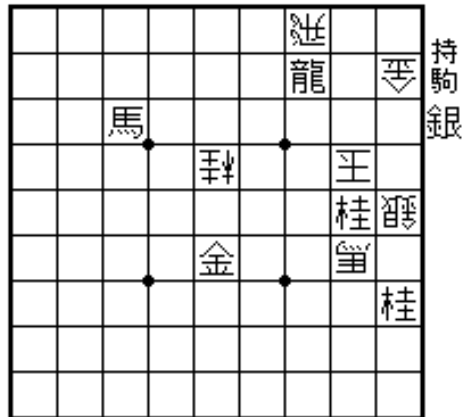
本作は12香配置のせいで全体的に構図が広がっているのが弱点であるが、この配置以外だと余詰むのでやむを得ない。私の場合、『駒数が増えるが盤面はコンパクト』と『駒数が減るが盤面が広がる』という選択肢が示されると、必ず後者を選択する作風。それがベストなのかは、本当は内容によりけりなんだろうなあ。

第9番



(発表先-冬眠日記)

第10番



(発表先-冬眠日記)

第9番 解答

- ▲21龍 △23玉 ▲11角生△13玉 ▲22角生△23玉
- ▲31角成△14玉 ▲11龍 △12金 ▲15歩 △23玉
- ▲22馬 △同金 ▲14龍 迄15手。

九州Gの半期賞作家、安武君のブログ「All by myself」で「11角生という手が登場する詰将棋の創作」が触れられていたので試しに…と創ってみた作品。よく考えると開き王手以外では成立しえない手であることがわかる。本作は邪魔駒消去を絡めた普通の作品。

52龍-22角型で故意に両王手を避けて11角生！という効果的な演出も理論的には可能。どなたか作ってみませんか？

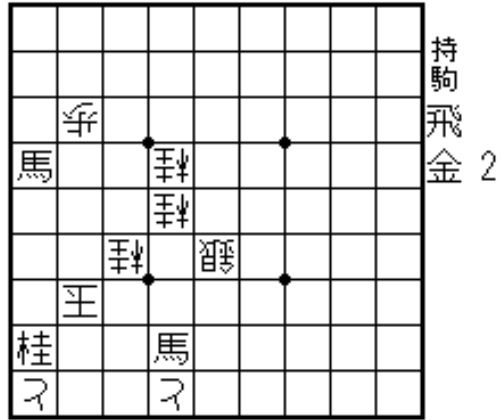
第10番 解答

- ▲33銀 △35玉 ▲44銀生△24玉 ▲51馬 △同飛
- ▲33銀生△35玉 ▲44銀成△同玉 ▲33龍 迄11手。

ちょっとしたパズル作品。初手51馬では33歩合、同馬（同龍は14玉）、35玉で逃れる。そこで一旦33銀～44銀生として51馬に同飛を余儀なくさせ、今度は33銀～44銀成で仕留める。

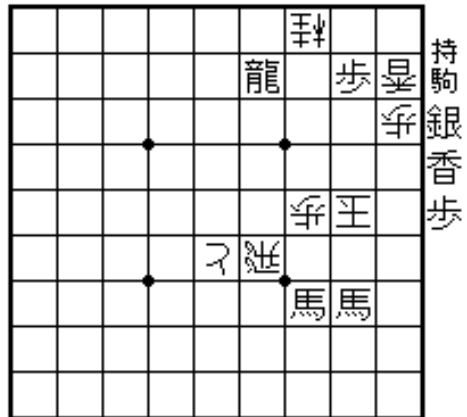
生と成を対比させる構成は私の作品群では珍しい部類だが、8手目34玉でもいいのはちょっと残念なところ。いかにも出番待ち、といった風情の73馬配置も気が利かない。冬眠日記に初めて載せた作品、ということで記念碑的な意味も含めて収録した。

第11番



(発表先-冬眠日記)

第12番



(発表先-冬眠日記)

第11番 解答

- ▲88金 △同桂成 ▲76馬 △同桂 ▲97金 △同玉
- ▲93飛 △87玉 ▲96飛成△同玉 ▲86馬 迄11手。

「取れる駒をわざとずらせて取らない手にする」手筋はトリッキーな味が強いので非常に好み。本作の場合、76馬、同桂、97金だと同玉、93飛に88玉ともぐりこまれて逃れ。

ブログに載せたときには56銀が48龍であったが、56とでも受かっている旨のコメントをいただいた。調べると初手85飛、86香、78金、98玉、97金に89玉、86飛、88歩、同金、同桂成として67馬引とできないので確かに紙一重で受かっている。ありがたく使わせていただいた。コメントいただいたふじい氏(藤井孝太郎氏?)に感謝。

第12番 解答

- ▲26香 △14玉 ▲25銀 △23玉 ▲45馬 △同飛
- ▲24銀 △14玉 ▲36馬 △同歩 ▲15歩 △同飛
- ▲23銀生△同桂 ▲44龍 迄15手。

5手目すぐに24銀とすると打歩詰。そこで45馬と飛を5筋に持ってきておき、36馬と捨てれば取歩駒が発生して打開できる、という仕掛け。森田手筋のような華麗さは無いが、ストーリーの明快さがウリ。

舞台を成立させるのに必要な42龍を活用する詰上りも予定とおりではあるが、この配置により全体的に余詰防止のための駒が必要となってしまう、予定したよりもだいぶごちゃごちゃとした配置になってしまったのは残念なところ。ブログでの出題時、利波偉氏から『易しいながらも筋が一本通っている』というコメントをいただき、救われた思いである。

あとがき

いかがでしたでしょうか。作品集というと、どちらかというと鑑賞するためのもの、ということで作品の部と解答・解説の部を分けるのが私の通例なのですが、今回は解かれることを重視して2題ずつ出題・次のページに解答掲載、というパターンにしてみました。え、それを後で書いても仕方ないだろうって？いや、だって解くことを強制はできませんし。まあ少しでも時間つぶしになってくれれば幸いです。

ブログをはじめて既に2年半が経過しました。ほとんど書くネタがなくて、そろそろ辞めどきか、なんて思ったことも無いわけでは無いのですが、ここで色々な方と言葉のやりとりができるのは、やはり捨てがたい魅力です。今しばし続けていきたいと思っておりますので、これからもどうぞお付き合いくださいますよう、心よりお願い申し上げます。

御礼にかえて

平成19年10月 冬眠蛙（市島 啓樹）

